



昨シーズン、萩原美樹子コーチの下で始動した早稲田大学バスケットボール女子部は、シーズン初めの春の関東トーナメントで創部2度目となる優勝を果たすも、秋のリーグ戦では怪我が続出し、チームの力を出し切れずに、4位という本意な結果に終わった。しかし、コミュニケーション

の大切さを再認識し、チーム一丸となった女子部は、インカレでは、リーグ戦で得た経験を生かしながら一戦一戦勝ち進み、創部初、悲願の全国制覇を成し遂げた。主力メンバーが多く残り、勝負の年である今年は、「強く、美しく!」をテーマに、3冠を目指す。

## 早稲田の根幹

今年の個性豊かなメンバーをまとめる主将を担うのが、望月(#26)である。高確率の3Pシュートと持ち味のスピードを生かした鋭いドライブを武器に、チームを勝利に導く。昨シーズン、怪我がリーグ戦とインカレを欠場した悔しさをバネに、今季はコート内外でチームを引っ張る。客観的に物事を見て、ポイントを押さえた的確な指示を出すことのできる、頼れる主将である。

そんな望月とともにチーム

をまとめるのが、副将の金山(#24)だ。チームの危機を救う安定感のある3Pシュートとジャンプシュートに加え、力強いドリブルやステップインは脅威である。またオフエンスだけでなく、ディフェンスでも動きを先読みし、相手の動きを封じる。

1年生時から早稲田の核として活躍し続ける丹羽(#8)。最上級生として今まで以上に責任感も増し、チームの大黒柱と称するに相応しい、その力強いプレイはコート下

を圧倒的に支配する。自ら攻めるだけでなく、周りを生かすために身体を張ったプレイが出来るのも強みだ。

昨年のリーグ戦で悔しい思いをした傳田(#51)は、インカレで自信を取り戻し、チームに勢いをもたらした。高確率なミドルシュートや力強いステップインだけでなく、針の穴を通すような絶妙なアシストなど、多彩なプレイで七色に輝く傳田のプレイをご覧あれ。

浅原(#61)は、小柄な体ながらコートに出るなりその存在を露わにする。最上級生としてリーダーシップを発揮し、華麗なドリブルワークで相手を抜き去り、隙あらば自ら果敢にゴールに向かっていく。

一般人試の星である齋田(#22)は、コート上では持ち前の脚力で縦横無尽に駆け回り、コートの外では積極的に声を出し、チームを盛り上げる。高確率の3Pシュートの持ち主であるが、もちろんそれは日々の地道な努力に裏付けされている。

## 個々の役割

4年生に支えられて、2・3年生も力を付けてきた。

今年3年生となる本多(#9)は、観るものを虜にする、インサイドでのトリッキーなプレイや、要所でのアウトサイドシュートなど、その時要求されるプレイを自ら察知して難なくこなす。上級生としての自覚も芽生え、安定したプレイで下級生を牽引する。

また、早稲田の司令塔として期待のかかる森(#49)は、

昨年、数多くの試合経験を積み、ゲームをコントロールする力にさらに磨きをかけてきた。華麗なアシストパスや、苦しい時に決めてくる外角のシュートも健在だ。

チーム一の長身である桂(#25)は、ゴールに吸い込まれるようなミドルシュート、得点へと繋がる見事なノールックパスなど、高身長ながら様々なプレイで相手を翻弄する。昨年に引き続き、攻守に渡る、コート下での体を張ったプレイにも注目だ。

昨年、粘り強いディフェンスで何度もチームの危機を救った神崎(#14)は、類稀なるバスケットセンスの持ち主である。相手の動きを一步先に読み、時にはクイックモーションのシュートで外から射抜き、時には一瞬にしてボールを奪い速攻の先陣を切る。

今年の新人にも目が離せない。

本橋(#15)は、高校時代、全国の強豪との闘いで鍛えてきた、広い視野や巧みなボールコントロール、新人とは思えない落ち着いたゲームメイクで、早稲田の個性を上手くまとめ上げる。

本橋と同じく昨年の高校界を沸かせた根岸(#11)は、175センチという身長を持ちながら1・4番までオールラウンドなプレイをこなす。ダイナミックなりバウンドや、しなやかなドライブでチームに勢いをもたらす。

それぞれの持ち味を生かしつつ、4年生を筆頭に一致団結して勝利を目指す早稲田。今年も伝統の早慶戦で、新たな1ページを刻む。



4年・主将  
望月桜子(#26)



4年  
丹羽裕美(#8)



4年  
傳田みのり(#51)



3年  
本多真実(#9)



2年  
桂葵(#25)